

◆冬フェスで柏崎盛り上げ

## 冬フェスで 柏崎盛り上げ

まちからで11日  
産大生らが企画

大学生が地域の人と柏崎の冬を盛り上げようというフェスティバル「柏崎の冬を若者の力で盛り上げ隊」が11日午前10時半から、市内西本町3の市民活動センター「まちから」で開かれる。主催は「まちかど研究室@新潟産大」。ステージ、飲食、出店、体験、学びなどを繰り広げる。

冬フェスは2020年1月以来2回目。参加は同大部活動(茶道部、写真部、書道部)の出店のほか、新潟工科大「動くスライムづくり」や新潟大の活動展示など。市内店は平田表貝店

(時絵〈まきえ〉コースターづくり)、いろはや製餡(あん)所(出張販売)、FREEFREE(食品サンプルづくり)。ステージ発表は午前10時50分からよさこい(新潟総踊り連風雅)、11時半からキッズダンス(naodance school)、午後1時から吹奏楽(産大附属高・産大コラボ)。抽選会は午後2時半。終了は午後3時。  
まちから駐車場の混雑時はみなどまち海浜公園の利用を呼び掛けている。

◆「柏崎の研究」発表21日  
工科大と産大 若い視点・発想で

# 「柏崎の研究」発表21日

## 工科大と産大 若い視点・発想で

柏崎商工会議所総合建設部会(阿部尚義部会長)が21日午後5時半から、新潟工科大、新潟産大の学生による「柏崎に関する研究発表会」を開く。市と工科大、柏崎商議所連携協定事業の一環。会場の同商議所またはオンラインで視聴できる。主催はほかに県建設業協会柏崎支部、柏崎建設業協同組合。

発表会は、柏崎の二つの大学で、勉学に励む学生が、柏崎に関するテーマについて研究した成果を報告する。「柏崎をより住みよい街に」「柏崎を活性化させるために」のテーマで、若い学生ならではの視点・発想から提案してもらう。また柏崎の未来を考える上でヒントも期待される。終了は7時半。

会場視聴(商議所大研修

室)は定員30人。オンライン視聴(Zoom利用)は定員80人、いずれも無料、先着順。申し込みは13日までに所定の申込用紙で、オンライン視聴(メールアドレス記入)か会場視聴を明記し、商議所中小企業相談所(電話22・3161、ファクス22・3570、電子メールyamada@kashi-wazakici.or.jp)へ。

研究発表は次の通り。

【工科大】退職後の高齢者の暮らしと充実度に関する研究(修士論文) 〓大学院2年・小林隼人 〓柏崎市全域におけるコンパクトシティの提案 〓工学科3年・高橋望 〓農村地域における関係人口を取り込んだ活性化策の検討 〓柏崎市中通地区を対象とした実践 〓同4年・松尾翔馬 〓バケツ

稲づくりの施肥・生育管理に関する動的教材の開発 〓同・権田光貴 〓出雲崎で交わり、生み出し、そして広がる 〓妻入りの町出雲崎における現代の廻船(かいせ) 〓問屋の提案 〓同・燕

木太雅

【産大】地域における交流拠点としての「小さな観光」に関する考察 〓新潟県柏崎市を事例として 〓文化経済学科4年・樋口萌香 〓新潟県製菓企業3社の経営分析 〓理念、製品、グローバル化、社会貢献 〓経済経営学科3年・岩田桜也 〓奥野飛龍 〓柏崎市高柳町の耕作放棄地再生(森林化) 〓事業 〓文化経済

学科3年・小林大祐・忠育翔 〓まちかど研究室 〓大学共同プロジェクト 〓「当地すころく かしワンダー」 〓柏崎市を駆けめぐれ! 〓文化経済学科4年・杉田有紀奈、経済経営学科4年・橋本竜平 〓水球のまち柏崎をさらに盛り上げる 〓産大生目線の企画と学んだこと 〓文化経済学科2年・渡辺秀

◆大学生の力で柏崎盛り上げ  
冬フェス多彩に

大学生の力で  
柏崎盛り上げ

冬フェス多彩に

大学生が地域のひとと柏崎

の冬を盛り上げようとい  
うフェスティバル「柏崎の  
冬を若者の力で盛り上げ  
隊」が11日、市内西本町3  
の市民活動センター「まち  
から」で開かれた。飲食や  
体験アース、ステージ発表  
などでにぎわった。主催は  
「まちから」研究室@新潟産  
大。

会場では同大の書道部、  
写真部、茶道部の体験のほ  
か、ふふ豆ご飯、タピオカ  
ミルクティー、おでん、焼  
きそばの飲食アースも出  
店。新潟大の活動発表、新

潟工科大のスライム作りの  
ブースもあった。よきこい  
キッズダンス、産大附属高  
吹奏楽部の演奏でステー  
ジを盛り上げた。

向陽町の長岡慶美さん  
(32)は李紅ちゃん(4)と琴  
葉ちゃん(7カ月)を訪れ  
「まちから」に来たのは初め  
て。この時期は出掛けにく  
いが、にぎやかで楽しい  
と食品サンプルのミニパフ  
エ作りを楽しんだ。キッズ  
ダンスに出演した荒浜小4  
年・柳真莉風さんは「会場  
は人がいっぱいいて緊張し



大勢の人が詰めかけた冬のフェスティバル市  
内西本町3のまちから

た。ポテトがおいしかった  
と笑顔。

イベントを企画した一  
人、新潟産大4年・本間陸斗  
さんは「天気も良くて、予  
想以上の人が足を運んでく  
れてうれしい。冬フェスは  
3年ぶりで今回が再スター



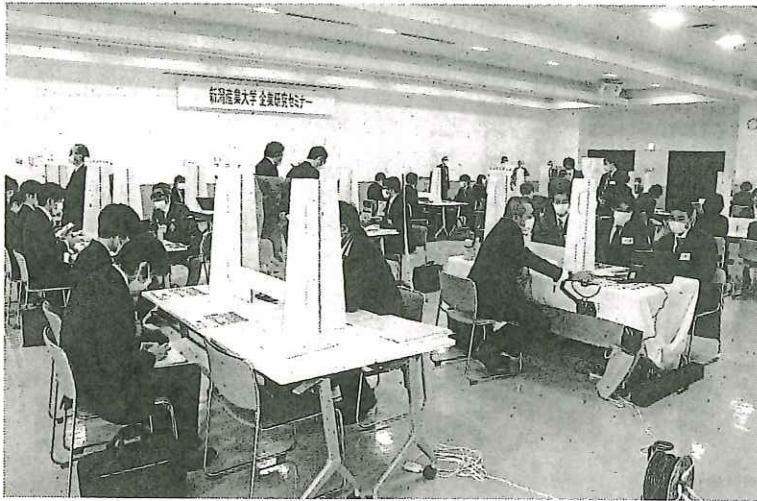
◆企業セミナー初めて学外で 新潟産大

企業セミナー  
初めて学外で

新潟産大

3月1日から本格的に就職活動が始まるのを前に、新潟産大(梅比良真史学長)は7日、産文会館で企業研究セミナーを開いた。学外施設での開催は初め。3年生約50人が就職担当者から説明を受けた。

セミナーは毎年2月に行われ、昨年初めての学外開催を計画したが、新型コロナウイルス感染拡大のため中止となり、2年ぶり。経済経営学科の石倉美優那さんは「リクナビやマイナビなどの合同説明会は新潟市内な



ので、こういう機会が柏崎であり、ありがたい」と4社を回った。文化経済学科の小泉健太さんは「第一志

望は公務員だが、各企業からいろいろ学べた。リクルートスーツに袖を通すと気持ち引き締まる思い」と

初めて学外で開催した新潟産大の企業研究セミナー  
——産文会館

緊張した面持ちで語った。

参加した30社・団体の中には同大卒業生のリクルーターも。昱工業(新潟市)の斉藤千紘さん(23)は2021年卒は「仕事内容や就活についても積極的な質問があり頼もしかった」、

スワロー工業(燕市)の五十嵐季菜さん(23)は22年卒「私の時もそうだったが、緊張していると思うので親しみやすい雰囲気づくりに気を付けた」と話した。

同大就職委員長の橋本次郎教授は「なるべく早い時期に企業担当者と直接会うことは就職指導する上でも有益」と3年生を員守った。





◆産大レクチャー ア・ラ・カルト<184>

企業変革の枠組み 高橋成夫 教授

産大レクチャー  
ア・ラ・カルト <184>

大規模な企業変革とは、企業全体であれ、事業部門、作業グループ単位であれ、戦略の大転換、文化の変革、グローバル化、Eビジネス、新技術の導入などに取り組むことである。変化の激しい激動の時代にあつて、変革に失敗することの影響は計り知れない。企業変革を実現するには、どうすればよいのだろうか。

経営学者コッター (J. P. Kotter)

は、大規模な企業変革に成功した多数の事例を調査し、企業変革が成功するためには、次のような8段階のプロセスを経る必要があると指摘している。

を高める段階である。第2段階では、変革の旗手を集め、変革を推進するためのチームをつくる。

あらゆるコミュニケーション手段が活用される。第5段階では、変革の行く手を阻む障害を取り除き、変革にそぐわない組織の構造やシステムを

第6段階では、短期的に目に見える形で成果を上げるような計画を策定し、実際に成果を上げる。その短期的な成果に貢献した社員に報いる努力を

第8段階では、企業変革後の新たな従業員の行動を、企業文化として根づかせ、新しい業務のやり方を定着させる。うまくいったように見える変革も、案外脆(もろ)いものである。伝統の力で過去に引き戻されるのを防ぎ、新たなやり方を継続し強固なものにしなければならない。

コッターによれば、これらの中で特に難しいのが、「行動を変えろ」とであり、そのためには分析結果を示して理性に訴えるよりは、目に見える形で真実を示して感情に訴えることが重要であると述べている。なぜならば、変革に成功した事例では、「分析し、考えて、変化する」流れではなく、「見て、感じて、変化する」流れの方が強力だからだと主張している。

企業変革の枠組み

高橋 成夫

めに新しいビジョンを描く。このビジョンを実現するために戦略を策定する。そして、第4段階では、その新しいビジョンや戦略を周知徹底する。社内には伝達するために、

変更していく。変革には今まで遂行されることがなかった新しい考え方が求められる。こうした行動に自発的に取り組むよう多数の人たちを刺激する。

する。第7段階では、ビジョンに基づいて改善された成果を定着させ、さらなる変革を推進する。新たなスタッフを雇用し、訓練しながら変革プロセスを強化していく。

これらの8段階のプロセスを無視して企業変革を進めようと、企業変革が失敗に終わってしまう原因となる。

コッターによれば、これらの中で特に難しいのが、「行動を変えろ」とであり、そのためには分析結果を示して理性に訴えるよりは、目に見える形で真実を示して感情に訴えることが重要であると述べている。なぜならば、変革に成功した事例では、「分析し、考えて、変化する」流れではなく、「見て、感じて、変化する」流れの方が強力だからだと主張している。



◆「柏崎の研究」に10テーマ  
工科大と産大生 研究成果を発表  
最優秀「まち研」プロジェクト

# 「柏崎の研究」に10テーマ

## 工科大と産大生 研究成果を発表

### 最優秀「まち研」プロジェクト

柏崎商工会議所総合建設部会(阿部尚義部会長)の「柏崎に関する研究発表会」が21日、同商議所で行われ、オンライン視聴と合わせ、約70人が参加した。新潟工

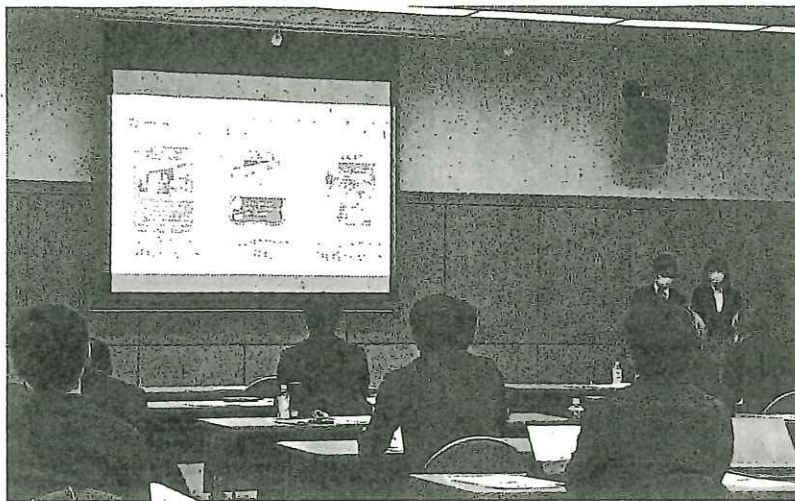
科大、新潟産大の学生が若い発想、視点で発表した。審査の結果、まちかど研究室2大学共同プロジェクトの企画が最優秀賞に選ばれた。

発表は10テーマ。退職後の高齢者を対象に行った暮らしのアンケートから、充実度などを考察した研究を皮切りに、次々と発表が続いた。西大学の教授ら4人が研究内容や新規性、社会性、提案力、プレゼン能力・資料工夫の点から審査に当たった。

最優秀賞の作品は、新潟産大文化経済学科4年・杉田有紀奈さん、同大経済経営学科4年・橋本竜平さんの「ご当地すごろく」かじワンダー〜柏崎市を駆け巡れ〜。本年度で11年目となった新潟産大、工科大の連携事業「まちかど研究室」の2大学共同プロジェクトとして提案された。

2人は新型ウィルス禍、活動が制限される中で、オンラインで会議を重ねた結果、柏崎のまちを模したすごろく形式のボードゲームの制作を決定し、本格的に活動を進めたことなどを発表。市内の施設や店舗に協力を求め、工科大はボードゲームの盤面やコマの作成、産大はイベントカードに各店舗のお勧め商品のデザインをするなど共同作業に取り組んだ。

ゲームには、地元地域通貨「風輪(ふうりん)通貨」の要素を取り入れ、ボランティア活動に参加したり、柏崎の魅力を発見したりした人が勝ちになるように作った。2年がかりの完成に「さらに完成度を高めたい」と期待を込めた。視点が新鮮で分かった。完成度が高かった」と関心を寄せた。同商議所では「貴重な時間を過ごしている学生たちの提案は、聞く側にとって大きな刺激になった。独創的な着眼点で、いいアイデアは興味深かった」と話した。



10テーマの審査が行われた「柏崎に関する研究発表会」。最優秀賞となった2大学共同プロジェクトの取り組み21日、柏崎商議所

発表会は、二つの大学の学生が見た柏崎のまちや地域の活性化、これまで取り組んだ研究を発表する場として親しまれる。本年度で21回目。開会あいさつで、阿部部会長は「長い歴史があり、市も注目している発表の場だ。気楽に気合を入れてやってほしい。アウトプットする力は非常に大事。自分の力を堂々と発表してもらいたい。ぜひ地元で就職、定住していただきたい」と期待を寄せた。

「ご当地すごろく」かじワンダー〜柏崎市を駆け巡れ〜。本年度で11年目となった新潟産大、工科大の連携事業「まちかど研究室」の2大学共同プロジェクトとして提案された。

2人は新型ウィルス禍、活動が制限される中で、オンラインで会議を重ねた結果、柏崎のまちを模したすごろく形式のボードゲームの制作を決定し、本格的に活動を進めたことなどを発表。市内の施設や店舗に協力を求め、工科大はボードゲームの盤面やコマの作成、産大はイベントカードに各店舗のお勧め商品のデザインをするなど共同作業に取り組んだ。

ゲームには、地元地域通貨「風輪(ふうりん)通貨」の要素を取り入れ、ボランティア活動に参加したり、柏崎の魅力を発見したりした人が勝ちになるように作った。2年がかりの完成に「さらに完成度を高めたい」と期待を込めた。視点が新鮮で分かった。完成度が高かった」と関心を寄せた。同商議所では「貴重な時間を過ごしている学生たちの提案は、聞く側にとって大きな刺激になった。独創的な着眼点で、いいアイデアは興味深かった」と話した。



◆地域に学び地域をおこすー実践活動レポートー

「柏崎冬フェス」熱気に包まれる

「新潟大学スナック」  
地域に学ぶ  
地域をおこす

ー 実践活動レポート ー

「柏崎冬フェス」  
熱気に包まれる

市内西本町2、市民活動センター「まちから」で2月11日、「柏崎冬のフェスティバル」柏崎の冬を若者の力で盛り上げ隊」が開催された。「まちから」研究室の新潟産業大学主催イベントとして、2020年1月末に初開催。「柏崎の冬の恒例行事にしたい」と構想していたが、この度満を持して3年ぶりの2回目の開催が実現した。

文化経済学科でまちづくりを学ぶ権田ゼミナールの学生たちが働きかけ、学生会や書道部、茶道部といった文化部の学生や卒業生たちも駆けつけて出店してくれた。学外からは新潟大学、新潟工科大学の地域活動団体や、産学金連携事業でお世話になった地元企業、前回好評だったキッズダンスチームなどが参加。飲食やワークショップのブース15団体、ステージ発表3団体という盛りだくさんの内容だった。会場は予想以上に多くの来

場者で、熱気に包まれていた。

角田充宏さん(4年)は、飲食ブースの手続きを担当し、準備段階から奔走した。「飲食関係の規則が以前よりも複雑になっていて苦労したが、来場者の楽しんでいる顔を見て、やりがいを感じた」と振り返る。

後藤麗玖さん(3年)は、所属する地元のよさこいチームを招待し、自らもステージに立った。「コロナウィルスによる影響を感じさせない大盛況で、私自身も大変多くの声援をいただいた。来年度は今回以上に盛り上げていきたい」と意気込む。

当日はこの冬の大雪を忘れさせるような晴ればれとした1日だった。

さまざまな制約の中でも決して腐らず、地域の方々のつながりをコツコツと育んできた若者たちのエネルギーが満ちあふれたイベントとなった。待ち焦がれていた

た、素顔で笑い合える春は、もうすぐそこまで来ている。

経済学部講師・権田恭子  
(同大学地域連携センター)

